

# ‘Woman’ の 語 源

——ことばは引き合う——英語の語源と由来

菅 沼 惇

## 目 次

1. 切りたい：共時と通時
2. 原点——OE 期での例
3. 過程——ME 期での例
4. 到達点
5. 鳥瞰図
6. 仮 説

### 1. 切りたい；共時と通時

医者には内科型と外科型とがあるそうだ。「僕胃潰瘍じゃないかな?」「内科で柔らかく治して貰ったらいいよ。外科はすぐ切りたがるからね。」「だがね何かの疑いでも見つかったら、サバツと切って貰った方が良いね。」とかいう話がよくある。

さて woman について、内科型の人、さしずめこれは文学的な人となるか、と外科型の人、と言えは此処では言語科学的な人、はさあそれぞれどういう感じでのこの語の語源的感興? に浸るであろうか?

先ず前者ならば「ああ何ともまーるい感じのすることばではないか? ウーマン、さすがに女性いやそうではない、女に良く合っている。」とか思うか知れない。まだその他色々な思いが出てくるであろう。それが又文学的人らしいことだ。読者の皆さんも自分の感じを色々感じて貰うと良いと思う。

もう一方の言語科学趣味の人だったらどうだろう。「ウーム、これはと何処で切れるかな? いや何ちゅうことはない、‘-man’が見えている。それにしてもその前の‘wo’って一体何だろうな?」と味も素気も無い。紫煙もグラスの芳香

も無い。切って切って切りまくる。ただ「wombとmanとが重なった<sup>1)</sup>」のかな?」とかいった言語科学的推測の心は他と違う。

大体言語学科の学生は暗号解読的才知・第六感に優れている。土族の言語をやるのにまさか印・欧語族の諸語をやる時のロマンチックな先入観と味に浸っておいてやれるものではない。味も素っ気もなくサッパリ切らなくてはならない。共時言語学をやる人はまあその辺止まりであるが、'woman'とかいうそんな言葉を解明しようとするには通時的感覚がなくては見込みがない。共時言語学的には'woman'は'woman'であって'woman'でしかない、それだけである。通時言語学は味がある、思いがある、ルーツへの憧憬がある。通時的にアプローチしてみよう。

## 2. 原点——OE 期での例

古期英語では「女性」という意味の語は次のようなものであった。

- (1) { mægden  
mægþ  
bryd  
wif  
wifman  
frowe  
hlæfdige  
fæmne

それらの中 wif, wifman が此処での関係語であるが、次の例のように使われていた。

(2) geworhte ðæt rib, ðe he genam of Adame, to anum wifmen<sup>3)</sup> Gen.

II<sup>2)</sup>-22

注 1) 「子宮」'womb' (=uterus) を有する「人間」'man'。そういうのを何と云うのだろうか? 民間語源 (Folk Etymology) と云うのだろう。丁度 'buffalo' を実しやかに 'boeuf à l'eau' (=ox at the water) とか言ってみたり。

注 2) 以下下線は特に断らない限り著者による便直上の印である。

3) prep. to に支配されている為に wifmen と e になっている。nom. 格は wifman と a であること。(6)の wimmen の e も dat. 格 sgl. である為に e となったものである。

(=And wrought the rib, that he took of Adam, into a woman)

(3) seo næddre cwæð to ðam wife: *Gen.* III<sub>-1</sub>

(=And the adder quoth to the woman:)

(4) Hi wæron ða buta, Adam 7 his wif, nacode *Gen.* II<sub>-25</sub>

(=They were then both, Adam and his wife, naked)

(5) He lædde þa ongean Loth...<sup>4)</sup> mid wifum *Gen.* XIV<sub>-16</sub>

(=He led then again Lot...with women)

このように、この両語 wif, wifman は、(4)のように「妻」の場合には wif に限られるようだが、同じ意味・環境で使われていた。今一寸制約的なことを付言したが、やはりそういうように 'wifman' には「人間」である、ただ「女」という「人間」であるという程の意味・制約が内包されていたのであろう。

この wifman が古英語期に既に時として 'wimman' として現れることがある。次のような例である。

(6) Nu þam wimmen þe ic secge: *Gen.* XXIV<sub>-14</sub> (MS. C)

(=Now to the woman to whom I say, "...")

(7) God gewitnode ealle hys wimmen, *Gen.* XX<sub>-18</sub>

(=God punished all his women,)

(8) on þare tide þe wimmen woldan wæter feccan. *Gen.* XXIV<sub>-11</sub> (MS. C)

(=at the time that women would fetch water.)

### 3. 過程——ME 期での例

これが更に中期英語期になると、その古期英語期の wimman も見られるし、その外にその 'i' が 'o' に変わった woman も見られるようになる。次の例等である。

(9) God wimman scæ wæs. *The Anglo-Saxon Chronicle*, MCXL.

(=A good woman she was.)

(10) the Lord God bildide the rib which he hadde take fro Adam in to a

注 4) 以下点線は特に断らない限り著者による文中一部省略を意味する便直上の印である。

womman, *Gen.* II-<sub>22</sub> (Wycliffe 訳後版)

(=the Lord God made a woman of the rib which He had taken from Adam,)

(11) Which serpent seide to the womman, *Gen.* III-<sub>1</sub> (同上)

(=And the serpent said to the woman,)

このように Wycliffe の *Genesis* では後版は womman が多出し、前版は woman と single 'm' のものが多出する。

また pl. 形では次の例等がある。

(12) He brouzte azen..., also wymmen *Gen.* XIV-<sub>16</sub> (Wycliffe 訳後版)

(=He brought again..., also women)

(13) in that tyme in which Wymmen ben wont to go out to drawe watir, *Gen.* XXIV-<sub>11</sub> (同上)

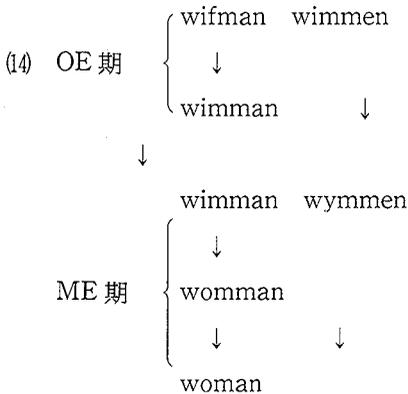
(=at that time at which women were wont to go out to draw water,)

4. 到達点

そしてとうとう現代英語期では単数では 'woman' が選ばれてしまい、複数では 'women' が選ばれるに至った。

5. 鳥瞰図

以上のことを語形上鳥瞰しよう。





ModE 期 woman women

## 6. 仮説

結局 OE wifman は wif に man が付加されて作られたのであろう。wif は中性名詞であり、man は男性名詞であるが、wifman も男性名詞である。この wifman が時を経るにつれて、ME では先ず wimman となるが、これは wifman の f が隣の m に引きずられて同化してしまったのであろうし、そしてその出来上がった wimman なるものは次に今度はこの i が -man の a に引かれて同化されようとして wom- と o に成り、合計して womman となったのであろう。そしてこの womman はそのまま使われていく中にその double m の発音の不自由さ加減から自然に single m へと譲ってしまって、woman となったのであろう。そしてその後はもう音環境が都合良く整備されてしまったからにはもうこれ以上何も変化せざるをえないような要素はなくなっているのだ。ほんとに何とも言えないようにまーい玉石に磨き上げられてしまったものだ。

複数形の方は man 自身が母音変化で men と複数になる名詞であったので、wifman が複数になろうとすると wifmen となったのであろうし、次にこの f は単数形での変化過程と同じことが起こって m となったのであろう、wimmen となった。そしてまた単数形の変化過程では i が o に変わったが、複数形では -men なのでその母音 -e- の前母音性に引かれて、やはり前母音の -i- を保持し続けて wim- の音節に変化を起こさずに、wimmen を続けた。double m の single m への変化は単数形の場合と同じことであろう。

これらの事情は人間言語における何とも言えない動き、即ち音環境の緊密性を思わせるものである。更に ModE では複数形は外形上は women と -o- に変わっている。これは ModE 期における整合性の反映で、作為的变化であろう。内実はその音 [ i ] に残っているのである。

## 引用書目

1. *The Old English Version of The Heptateuch*, ed. by Crawford, S. J., 1922.

2. *The Anglo-Saxon Chronicle*, Vol. I by Thorpe, B., London, 1861.
3. *THE HOLY BIBLE made from The Latin Vulgate by J. Wycliffe & His Followers*, ed. by Forshal, J & Madden, F. OUP, 1982